

金沢

Kanazawa Traditional Arts & Crafts

AUTUMN
2003
Vol.2

特集

伝統工芸に見る

金沢四季の意匠

【秋編】

秋の金沢風情に想いをはせる、図案コレクション

金沢の伝統的工芸品

加賀友禅／金沢九谷
金沢仏壇／金沢箔
金沢漆器／加賀繡
希少伝統工芸

四季をいつくしむ 心が受け継ぐ、金沢の美学



金沢伝統工芸いまむかし

百万石の嗜みが 育てた工芸

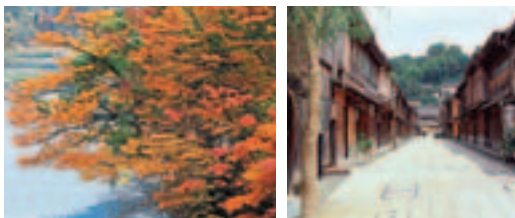
日本において伝統工芸が盛んな地域にはいくつかの共通点があります。ひとつには藩政時代にその地域を治めた大名が工芸振興に深く関わっていること、また多くの工芸品を用いる茶の湯が盛んであること。金沢はその条件を見事に備え、工芸大国としての名声を誇っています。

加賀百万石の祖、前田利家は、織田信長の影響を受けて茶の湯の世界への理解を深めました。利家は、天正十五年（一五八七）、天下統一を目前にした豊臣秀吉が開いた「北野大茶会」で秀吉の右座に座り、茶会の実務に当たったとされます。

三代利常は小堀遠州から茶の湯を通じた文化的な薫陶を受け、寛永十九年（一六四二）には裏千家の始祖・千宗室を茶具奉行として召し抱えます。工芸品の収集、茶の湯の指導、美術工芸の振興など、利常の文化施策は遠州ら茶人に負うところが多いとされます。

根っからの茶人であった五代綱紀は、武士はもとより御用職人や家柄町人にもお茶の作法を身につけるよう命じています。城下で茶の湯が盛んになるにつれ、茶席に用いる道具を含めて優れた工芸品の育成が推し進められました。

数々の伝統工芸を生み出す源流となった金沢独自の茶道文化は、今もこの地に息づいており、市内に点在する茶室では、折々に風雅な茶会が開かれています。



INDEX

■特集 伝統工芸に見る

3 「金沢四季の意匠」
— 秋編 —

7 加賀友禅

草花の瞬の美を衣にうつす審美眼

9 金沢九谷

先人の鮮やかな色絵に見る、金沢九谷の真髄

11 金沢仏壇

装飾美に見る、金具職人の気概

13 金沢箔

魂にひびく、金箔の神秘の輝き

15 金沢漆器

茶の湯文化に咲く清らかな花

17 加賀繡

日本の美意識と伝統を描く絹の糸

19 希少伝統工芸

砂張銅鑼 茶事の文化が育んだ音の深遠
和 傘 和の風情あふれる、色と模様の饗宴

21 金沢伝統工芸ショップガイド

お気に入りの逸品を選ぶ時間をゆつくり、楽しむ旅の折に訪れたい、伝統工芸のショップガイド



吉田淳子作 訪問着「山帰来」(加賀染振興協会)



草花に露が宿る秋の早朝。兼六園の木立を借景にした茶庭玉泉園は、一層しっとりとした表情を見せます。この様子を表した「白露」とは、なんと清々しい名でしょうか。旧暦九月九日は陽の数である「九」が重なることから「重陽の節句」と呼ばれます。「菊の節句」とも言われ、古来、不老長寿の力があると信じられる菊の花弁を浮かべた酒で長寿を祈りました。

九月半ば過ぎ、中秋の名月は一年で最も美しい月とされます。金沢市内の料亭や寺院では風雅な月見の茶会や観月句会が催されます。この日は秋の収穫を祝う日でもあり、三万に月見団子をのせ農作物や秋の七草(萩・薄・葛・撫子・女郎花・藤袴・桔梗)を飾る風習もあります。

暑さ寒さも「彼岸」までと言われるように、秋のお彼岸を過ぎれば街を歩く人々の装いも木々も秋仕立てに。紅葉の錦は卯辰山から街中へと広がります。紅葉の異名を持つ兼六園の翠滝は、左右で品種の違う楓がそれぞれに色づき、格別の美しさを誇ります。

九月下旬、城の石垣に必要な石を引いたことから石引町の名を残す、小立野・石引通りではその歴史を再現し、大きな戸室石を曳く御山祭りが行われます。市内各神社で秋の祭礼が催されるのもこの頃です。夜の風情もひとしお。ライトアップされた金沢城や兼六園は、街中の喧騒を忘れさせる静寂のひとつときをもたらします。

頬に澄んだ空気を感じたら、金沢の秋のはじまり。
今も昔も変わらぬ季節の風情や草花を、
匠の筆があざやかに描き出す。



秋の風
 芭蕉

太陽は明るいけれど、吹く風には秋の気配が――。
 初秋の金沢を訪れた芭蕉の一句。

意匠に、かたちに、色に、さまざまな表情を見せ、
 伝統の中にもモダンな息吹を感じさせる金沢九谷。
 撮影協力：蜷屋

秋

朝夕に肌寒さを感じる「寒露」の頃、犀川の河川敷では、この川のほとりに生まれ育った作家・詩人、室生犀星を偲ぶ犀星祭りが行われます。秋風が爽やかな犀川の土手には彼岸花、秋桜が咲き乱れ、格好の散歩路となります。

日が駆け足で暮れる「立冬」。木枯らしと小春日和が交互に現れて、そろそろ冬の足音が聞こえる頃、兼六園では立ち木を雪から保護するために枝を縄で吊る「雪吊り」作業が始まります。木々は円錐形の美しい幾何学模様になり、人々も長い冬への心準備を始めます。

「小雪」が来れば冬の訪れもうすぐ。長町界隈では雪から土塀を守る「薦かけ」が見られます。長町武家屋敷街を挟んで流れる大野庄用水と鞍月用水は江戸時代からの歴史を持つせせらぎ。百万石の時代に思いを馳せるそぞろ歩きも楽しいものです。

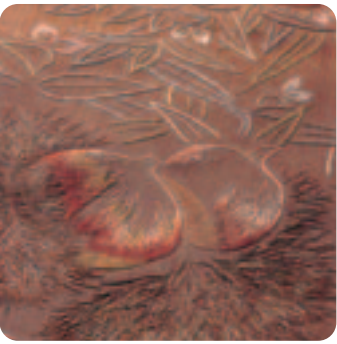
※白 露：九月八日頃
 秋の彼岸：九月二十～二十六日頃
 寒 露：十月九日頃
 金沢城・兼六園ライトアップの秋の段々
 十月三十一日～十一月二日、十一月七日～九日
 立 冬：十一月八日頃
 小 雪：十一月二十三頃

楓・紅葉 ● かえで・もみじ



楓は古くから文様として用いられ、形や色の美しさから染物などに多用されます。蛙の手に似ているため、「蛙手」と呼ばれますが、これが「還る」、還暦に通じるため、長寿を表すものとして喜ばれます。

栗 ● くり



「搗ち栗（かちくり）」は、「勝ち」に通じることから、出陣や凱旋の祝賀には欠かせないものでした。独特の形の実、葉、白く垂れて咲く花など、それぞれ画材としても好まれます。

蜻蛉 ● とんぼ



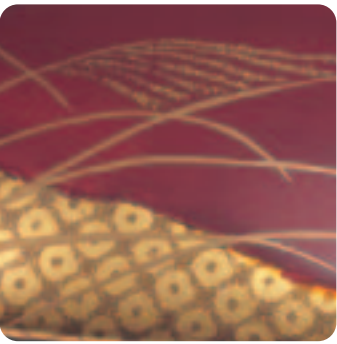
「あきつ」「あきず」は蜻蛉の異名。日本は神代の頃「秋津島・蜻蛉洲（あきつしま）」と呼ばれました。稲穂や薄の上で赤トンボが群れ遊ぶ姿は、日本人の秋の心象風景とも言えます。

秋草文様 ● あきくさもんよう



萩・薄・葛・撫子・女郎花・藤袴・桔梗の秋の七草に加え、竜胆、菊など、秋の野に見られる草花を取り合わせたもの。秋草が寄り添うように咲く風情には日本の情緒があふれています。

薄 ● すずき



秋の七草のひとつ。月の女神の降臨を助けるとされ、日本独自の風習として十五夜や十六夜に献花として備えられます。秋風になびく姿が特に好まれ、蒔絵、きもの、陶器などに描かれます。

秋桜 ● こすもす



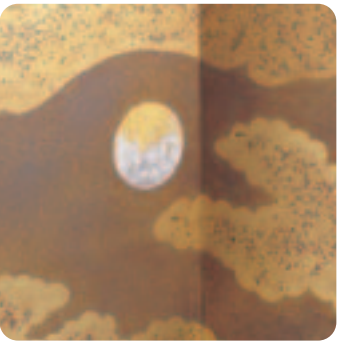
秋桜との異称も持ち、古くから親しまれているキク科の一年草。白、薄紅、深紅など色とりどりの秋桜の花が野原一面に咲き風に揺れる様子は、秋の風物詩となっています。

菊 ● きく



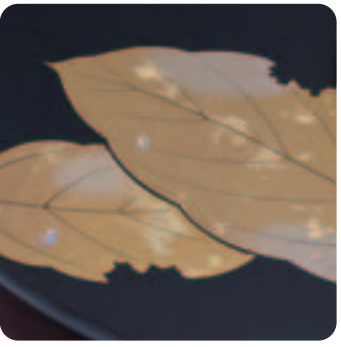
不老長寿の力があるとされる菊。色、形、香りに優れ、多くの絵画や工芸品に描かれてきました。「菊花文」、「菊枝」、「菊の丸」、「菊菱」、「菊桐文」、「菊花文」、「菊散らし」など、さまざまな意匠があります。

月 ● つき



どことなく侘しく叙情的な月。中秋の名月は秋の風物詩として定着し、秋の草花との取り合わせも多く見られます。十六夜、立待月、居待月、寝待月、更待月など、月の名を呼び分ける稀な風習に、日本人の美意識が表れています。

枯葉 ● かれは



紅葉も盛りをすぎた夕暮れ時、木々からはらはらと舞い落ち地面に降り積もる枯葉に、人々は過ぎゆく季節への思いを寄せます。晩秋を彩る枯葉はまた数々の工芸品をも彩っています。

加賀友禪

KAGA
YU ZEN

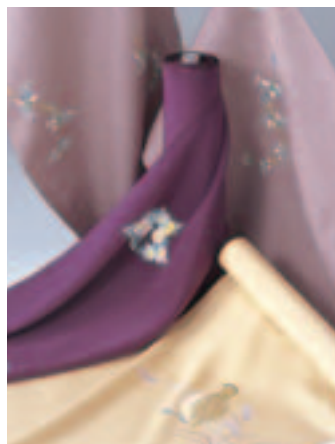


一枚の絵として見ても美しい加賀友禪。
纏うことによってその美的価値はより高まる。
大村洋子作 訪問着「松韻」(加賀染振興協会)

草花の一瞬の美を衣にうつす審美眼

四季折々の草花の美しさを永遠に留めおきたい。芸術家・工芸家のこうした衝動がもつとも直接的に表れているのが加賀友禪です。機械化を拒み、昔ながらの手仕事の技をかたくなに守る加賀友禪は、数多くの工程において熟練の職人の手を経て製作されます。その最も上流にあるのが、友禪作家による意匠設計であり、彩色とともに友禪作家の個性と感性がもつとも顕著に表れる工程です。作家は金沢の四季おりおりの自然や風景、文化などから着想を得て、加賀友禪の伝統をふまえつつも新鮮で、また着る人の美しさが際立つ意匠を練り上げます。

絵画調で写実的な表現が特徴的である加賀友禪の世界では、スケッチがすべての基本となります。花が咲いてから、花びらが散り、やがて茎を残すだけになるまで、その花の一生を描き尽くすために、数冊のスケッチブックが費やされることもあります。加賀友禪には、草花の瑞々しいのちをきものに封じ込めてしまうかのような作家の強い想いが込められているのです。



加賀友禪の製作工程
意匠設計
仮仕立て
下絵
糊置き
地入れ
彩色
下蒸し
中埋め
地染め
本蒸し
水洗い
湯のし
上加工
染色補正
仮仕立て



重陽の節句は別名、菊の節句。
華燭の日の装いには、格調の高い菊文様を。
矢田秀樹作 黒留袖「重陽」(加賀染振興協会)



白ほととぎすと星くず草を描いた、清楚で落ち着きのある訪問着。
吉岡小百合作 訪問着「花佳人」(加賀染振興協会)



満開のコスモスを愛でるように、可憐な蝶がひらひらと舞う。
上田外茂治作 訪問着「風の散歩道」(加賀染振興協会)

匠の技 上田 外茂治 氏

●うえだ ともし

金沢美術工芸大学で染色を専攻、型絵染や切り絵の世界に興味を持つ。卒業後、大阪のデザイン会社勤務を経て帰沢、二十五歳で毎田仁郎氏に師事し、加賀友禪の一連の工程を身につける。昭和五十八年独立。平成六年、伝統加賀友禪工芸展で金賞受賞。以来多数入賞を果たす。平成十一年加賀友禪技術保存会会員に認定。
着る人には「図案に盛り込んだストーリー性を楽しんでもらいたい」という。



秋の代表的な意匠は、菊や楓、秋桜など。色づく山々、実りの時を思わせるあたたかみのある色や、枯葉色、黄土色など、とりした色を基調にして、秋らしい装いを楽しみたいものです。

コラム

更衣の風習

十月一日の更衣(ころもがえ)は、四季の移り変わりがはっきりした日本の風土の中で、平安時代に生まれた習慣で、この日を目安に衾を着用します。季節に応じて仕立て方や素材を替える、色や文様にこだわるという美意識は、和装独特の楽しさです。

金沢

KANAZAWA
KUTANI

九谷

先人の鮮やかな色絵に見る、
金沢九谷の真髄



欧米の蒐集家に好まれた東洋趣味あふれる美人画。
初代光山作 美人画花詰<昭和初期>(片岡光山堂蔵)



四季折々の草花を、
地を埋め尽くすように描き込んだ花詰。
酒井栄山作 金彩花詰<昭和30年頃>(片岡光山堂蔵)

明治・大正期、九谷焼は殖産興業の波に乗り、産業九谷として黄金時代を築き上げました。武者絵、芸者、富士山、農耕の図などをモチーフに、日本の文化風土を金彩を交えて鮮やかに表現した九谷の上絵は、欧米人の求める東洋趣味に合致、数多くの作品が貿易商人の手により海外を越えました。九谷の輸出高は明治10年頃から爆発的に増加し、明治20年には日本の陶磁器貿易の第1位となりました。

特に金沢九谷の精緻な色絵技術は海外で開催された博覧会において、比類なきものとして高い評価を受けます。明治20年を境に内需転換が図られるようになってからは、第九師団関係などで金沢を訪れる人々を対象に新たな販路を見出します。

この時代に色絵技術がめざましい発達を遂げた背景には、金沢町区開拓所明治5年・明治11年に石川県勸業試験場と改称)や金沢工業学校(明治20年)の設置など、官民一体となったバックアップがありました。平成の現在、金沢市と金沢九谷振興協同組合の手によって、金沢九谷独特の色絵世界を復興させる試みが行われています。

「金沢九谷色絵専門塾」一期生作品



希少伝統産業 金沢九谷

色絵専門塾

平成12年より金沢九谷の色絵技術を受け継ぐ職人の育成を目的に、金沢九谷色絵専門塾が開講されています。平成15年4月には一期生6人が卒業、色絵師としての第一歩を踏み出しました。約3年間にわたって研鑽を重ねてきた卒業生たちの筆が描き出すのは、先人のゆるぎない技術を継承しつつも、現代的な感覚とそれぞれの金沢九谷に対する“想い”を盛り込んだ図案。暮らしに取り入れやすい、新しい金沢九谷の息吹が感じられます。



金沢九谷黄金期を彩った色絵の美

明治・大正にかけて数多くの上絵の技法や画風が開発され、金沢九谷は九谷焼の優品の代名詞となった。その重厚でありながら華やかさを失わない精緻な描写に見る者は息を呑む。



初代北山作 赤絵唐人物飾瓶(北山堂蔵)



鎗木製 本金小紋手割取人物画急須(鎗木商舗蔵)



鎗木製 小紋手風景画瓶(鎗木商舗蔵)



初代北山作 細字馬上杯(北山堂蔵)



鎗木製 本金十二支画蓋付菓子器(鎗木商舗蔵)



清水美山製 垣菊園小紋手(九谷焼諸江屋蔵)

金沢

KANAZAWA
BUTSUDAN

仏壇

装飾美に見る、金具職人の気概

金沢仏壇は、金沢文化の総括業と言われる。その工程は大きく七段階に分けられます。仏壇を開けてはじめてその存在感を漂わせるのが、仏壇金具です。ひとつの仏壇には百個前後の金具が使われるといえます。仏壇の高さが異なれば、金具の寸法も変わるため、あらゆる金具は、職人が一つひとつ、手仕事で丹念に作り上げます。

金具製作の工程では、金沢仏壇の黎明期からほとんど変わることのない手作業が、今も脈々と続けられています。まず銅合金あるいは銅板を加工した地金を寸法取りし、針で輪郭をたどります。これを切りたがねで切り出した後、模様たがねで細かく模様を掘り込み、形を整えます。酸で油やさびを取り除き、水で流して、充分に乾燥。仕上げに下塗り、表面のゆがみを直し、めっき加工を施します。金具の仕上がり、表情は、手かけた職人によって異なるといえます。金具職人は紙とペンを携えて寺社を訪れ、文様のヒントを得てくることもあります。工場でたがねを鍛造することもありますが、仏壇金具は職人の美意識と技術が生み出す、小さな美の結晶と言っても過言ではありません。



塗は中塗り、上塗りの後、呂色研ぎを。本金研出磨技法による鮮やかな蒔絵と、金・銀・すずの豪華な切金仕上げが、伝統の重厚さを生み出す。70代 金沢仏壇新三方開 (W74×H168.5×D66) (澤田仏壇店)



金沢仏壇の製作工程
木地製造 ▶ 宮殿製造 ▶ 箔彫製造 ▶ 木彫製造 ▶ 金具製造 ▶ 漆加工 ▶ 蒔絵 ▶ 呂色 ▶ 箔押 ▶ 組立

伝統の技を残しながらも、遠山桜の続き箔絵という新しい表現手法に挑戦した作品。第16回全国伝統的工芸品仏壇仏具展で新デザイン部門中小企業庁長官賞受賞。50代 新型金沢仏壇 (W60×H156×D57) (池田大佛堂)



燦然と輝く仏壇の精緻な仕上がりをより引き立てる金具。模様、絵柄はすべて手打ちによって仕上げられる。

匠の技 杉林 孝幸氏

●すぎばやし たかゆき

金沢仏壇の金具製造を行う伝統工芸士。昭和四十年、二十歳で今村孝氏に入門し、四十八年に独立。石川県伝統産業振興協議会・技能奨励賞を受賞。現在長男とともに金具製作に取り組みつつ、市内各所で実演を行い、その妙技を披露している。修理の注文も多く、先人の優れた「仕事」から学ぶところも多いという。「仏壇は皆が朝晩手を合わせるところ。それにふさわしいものを作りたい。」



コラム

からくり回転仏壇（ニ仏壇）
金沢仏壇商工業協同組合

先祖を祀ることは変わりありませんが、現代社会の中でライフスタイルや需要はさまざまに変化しています。金沢仏壇も、従来の荘厳で豪華な仏壇だけではなく、時代のニーズに合わせた新しい仏壇のあり方を模索しています。仏壇と神棚が表裏となったこの「からくり回転仏壇」も限られた居住空間で、場所をとらず、シンに合わせて使い分けられる仏壇として、広く提案されています。（裏面は多目的用途別に組替えが可能です）詳しくはホームページをご覧ください。
<http://www.kanazawa-butsudan.or.jp/>

細部に至るまで藩政時代から受け継がれる伝統技術を施した仏壇「大賀二号」。
(金沢仏壇商工業協同組合)

愛らしい貝合わせや髪飾りがのぞく
小引出しは、まるで宝箱のような美しさ。



上段:
古くから日本で親しまれてきた貝合わせを、
純金箔を使いディクパージュで。
(左)「貝合わせ 秋」
(右)「貝合わせ 菊」(箔座)
下段:左から
「木製漆溜塗バレッタとんぼ」
「木製漆塗バレッタ跳ねうさぎ」
(箔一本店 箔巧館)
「貝蒔絵(月にうさぎ)ブローチ」
「貝蒔絵(うさぎ)ブローチ」(今井金箔)
「桐二つ引タンス」(箔一本店 箔巧館)

金沢箔

KANAZAWA
HAKU



魂にひびく、金箔の神秘の輝き

豪奢な黄金の光を放ちつつも、どこか儚げで雪のように消えてしまいそうな金箔。その厚み、わずか二万分の一ミリ。英語ではgold leafといい、はらはらと舞う黄金の葉を思わせます。この金箔づくりの技術を支えているのが箔打紙です。

金箔の製法には、和紙を独特の製法で仕込んで箔打紙として用いる「縁付(えんづけ)」と、特殊紙にカーボンを塗布して用いる現代的な「断切(たちきり)」の二つがあります。縁付は箔打紙によって生まれる柔和な風合いが特徴で、主に神社仏閣や高級仏壇、文化財の修理などに使われます。

縁付製法の箔打紙の素材となるのは、金沢産の中島紙や二俣紙。三〜四ヶ月におよぶ紙仕込みの工程では、和紙表面に薄い膜を作るため、和紙を「アク」(灰汁)に浸す・叩く・乾かすという作業を繰り返します。アクに柿渋や卵を加えることで、上質の箔の条件である「ナリ」(箔のハリ)と「光沢」と「トケ」(なめらかさ)を満たした、しなやかで強い箔打紙が仕上がります。この工程のうち、箔打紙は初めて金合金を挟み込み、柔らかな光を放つ金箔を生み出します。

職人によつては異なる表情を見せる金箔は、その輝きに箔職人一人ひとりの心意気を映しているかのようなようです。

金沢箔の
製作工程

金合わせ

延金

紙仕込

澄打ち

仕立て

引き入れ

打ち前

渡し仕事

抜き仕事

箔移し



純金箔から縫り上げた金糸で織った袋帯は、
上品で重量感のある煌びやかさが魅力。
「本金袋帯」(かなざわカタニ)



「大和路丸盆(木製)」 「手鏡よしの春秋」
(金銀箔工芸 さくだ)

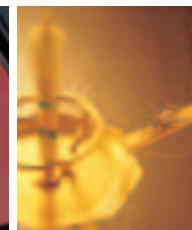


左から
「純金箔春秋瓢箪」
「扇面皿」
「浮橋葉書入つた」
「銀河六角小箱(小) 春秋」
(金箔工芸 田じま)

箔一オリジナルの色の重なりが不思議な魅力の古代箔のコースターと茶托。上:「古代箔 木製小判茶托(5客揃)」下:「古代箔 木製コースター(5客揃)」(箔一本店 箔巧館)



「黒貝の香立」(今井金箔)



「手燭台」(今井金箔)



金・銀箔が秋の月夜をやさしく表現。
「小屏風 月と雲」(箔一本店 箔巧館)



バック:正絹に純金箔とプラチナ箔を使って紅葉を表現。内側に配した紅葉が、風呂敷を開いた際に見える遊び心が楽しい。
「小風呂敷 紅葉」(箔座)

手前右:ケヤキの生地に漆を塗り重ね、銀箔で月を描いた盃。月の満ち欠けで秋を楽しめる。
「月文盃 満月/半月/三日月」(箔座)

手前左:宝珠型の香合。開けた時に金箔の輝きが目に飛び込む。
「香合 立田川(上) 秋草(下)」(箔座)

匠の技 熱野 嘉和氏

●ねつの よしかず

伝統工芸士。伝統的な「縁付(えんづけ)」技法を頑なに守り、箔を打ち続ける箔職人。祖父の代から続く箔打職人の家に生まれ、幼い頃から早朝、深夜と一家総出の箔打を経験。中学校を卒業後、祖父、父の後を継ぐ。箔職人の真の面白みは四十歳を過ぎて、「箔づら」の違いが分かるようになってからだという。

良い金箔は、「良い箔打紙から素直に出てくるもの」という。



匠の技 村田 百川氏

●むらた ひやくせん

富山県出身。時代の先端を行く企業に勤めつつも、伝統工芸に心惹かれ漆芸を学ぶ。昭和四十五年村田家に入り、本格的に漆芸に取り組む。五十年、裏千家井口海千宗匠より百川の号を賜る。三十五歳で金沢美術工芸大学の聴講生となり大場松魚氏に学ぶなど、常に学び続ける気概が品格のある蒔絵を生む。金沢市工芸協会展などで受賞多数。「花、木、庭、茶事、すべてが学びの源泉」という。



金沢漆器の
製作工程

木地
布張り
下地
塗り
蒔絵



めでたいものと慶ばれる“秋の実の成るもの”を描いた愛らしい盃。
「絵変り蒔絵引盃」(能作)



季節の植物を映した上品な椀は、濃とした姿も美しい。
「吹寄蒔絵吸物椀」(赤地漆器店)



心にゆとりを、しぐさに格調とたおやかさを添える、塗りの調度。
「秋草蒔絵視箱」(能作)



長寿の象徴として尊ばれる菊を、繁栄と喜びを示す唐草と組み合わせた伝統の蒔絵文様。
「菊唐草蒔絵小吸物椀」(能作)

金沢漆器の歴史は、三代藩主前田利常が京都から蒔絵の名工五十嵐道甫を招いたことに始まります。茶の湯にも通じていた道甫は細工所において細工人の指導にあたるとともに、前田家の調度品を製作して、京の貴族文化の優美さに力強い武家文化を加えた加賀蒔絵の礎を築きました。金沢漆器は茶の湯の文化とともに栄えつつ、現在も茶道具を中心に日常の食器や調度品として、使い手のことを魅了しています。

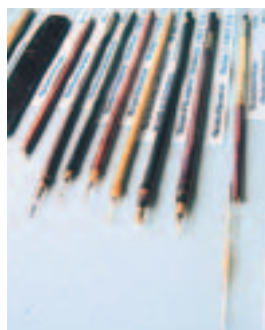
加賀蒔絵の華麗で重厚な存在感が際立つ金沢漆器ですが、生活に密着した道具として使ってほしいとの想いから、こと茶道具に関しては使い勝手の良さに最大の配慮がなされます。職人は茶事の四季、場所、出席者、あるいは茶棚の高さにまで配慮して、ふさわしい寸法、色彩、図柄の茶道具を創りあげます。そのためには緻密な加飾の技術に加え、茶の湯文化に関する深い造詣が求められます。

棗の蓋を開けたときに優美な蒔絵が現れる、小さな喜び。秋の茶会にふさわしい、モチーフの組み合わせ。図案ひとつをとっても、金沢漆器には、知的な遊び心が見え隠れします。

茶の湯文化に咲く清らかな花



目にも舌にも旨い膳を生み出す、料理と漆器の出会い。
伝統工芸が盛んな金沢では、器にこだわる料亭が多い。
＜撮影協力：壽屋＞



繊細な蒔絵の線を引く蒔絵筆には、鼠の毛が最適とされます。琵琶湖周辺の湿地にすむクマネズミの毛が最高とされていましたが、近年その数が減り、鼠の毛を使った筆は貴重なものとなっています。そのほか、蒔絵職人は鯛の牙、狸の毛、猫の毛、馬の毛など素材と形状が異なる極細の筆を巧みに使い分け、ある時は極細の線を描き、ある時は輪郭の中を塗り込み、またある時は緩急自在の描写を行います。

コラム

加賀蒔絵道具

金沢漆器

KANAZAWA
SHIKKI



「着物一枚に帯三本」と言われるように、
帯は装いの要となり、纏う人の格を高める。
袋帯（ぬいの今井）



加賀 紬

日本の美意識と伝統を描く絹の糸

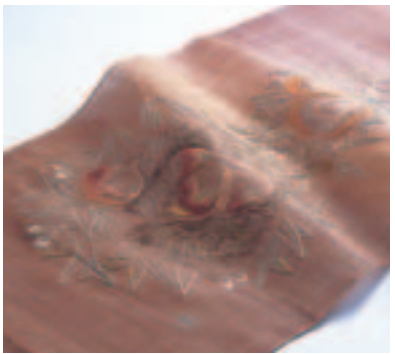
加賀の女性が、ひと針ひと針丹精に
繡い上げる伝統のこころと技は、日本
ならではの文化・風習や四季の風物詩
と結びつき、人の手のぬくもりを伝える
美しい意匠となります。現在、きもの
や帯などに施す伝統的な刺繡に加え、
新たな応用が提案されています。

初着（産着）もそのひとつ。日本に古
くから伝わるお宮参りは、男児なら32
日目、女児なら33日目に行われ、赤ち
んに母親の実家から贈られた初着を掛
け衣装として纏わせ、氏神様にお参り
します。初着には、健やかに育ってほし
いと家族の温かな祈りが込められて
いるのです。加賀繡の匠は色とりどりの
絹糸や金糸、銀糸を巧みに用い、その
祈りのこころを雅やかな意匠に込めま
す。四季の草花や古典から現代に至る
さまざまなモチーフが、加賀女性の繊
細な指先から描き出されています。

加賀藩祖前田利家の妻まつも、加賀
繡を得意とし、初着に花丸紋の刺繡を
施したと言われています。加賀繡は、人々
のこころと、和の風土・文化を描き出す、
稀なる美の技と言えるでしょう。



初着＜男・女児用＞（ぬいの今井）



柿渋染に栗の実、いが、実、葉を施した
秋の季節感あふれるタベストリー。（小林刺繡舗）



コラム

加賀繡専門塾



金沢市内のぬいの今井と小林刺繡舗で
は、平成八年より市からの委託事業と
して「加賀繡専門塾」を開講しています。
各教室では市内在住の受講生が、三年
間のカリキュラムで伝統技術の習得に
励んでいます。繊細な加賀繡の技法を
習得するには根気と熟練が求められ、
手先の器用な人でも慣れるのに三年は
かかると言われて
ますが、加賀繡の
技に魅せられた
受講者は、日々、
伝統の技術の研
鑽に努めています。

匠の技 今井 フクエ氏

ぬいの今井に嫁いで以来六十余年、加
賀繡に携わる伝統工芸士。平成八年勲
七等宝冠賞を賜る。平成十三年には国
の重要無形文化財指定の前田利家公着
用「鐘馗陣羽織」を、金沢美術工芸大学
と協力して復元。現在自ら加賀繡製作
に努める傍ら、後進の指導・技術の保存
に尽くす。
「昔は高級呉服と言えば加賀繡と言わ
れたもの。織物にも染物にもない、独特
の魅力があります」。



茶の湯で用いる古帛紗は、由緒ある布帛や高貴な織物で作るのが伝統。
菊や紅葉の花丸が愛らしく、普段使いにも取り入れたい。（小林刺繡舗）



匠の技

魚住 為楽氏

●うおずみ いらく

高等学校在学中より祖父・初代魚住為楽に師事。砂張を用いる高度な金工技術を継承し、砂張銅鑼の柔らかなで奥行きのある音色を守り続けている。平成十四年、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定。伝承が難しい音というものについて、「良い音はからだで覚える」という。

二俣和紙

やわらかな風合いと色彩が映える二俣和紙は箔打紙や和紙クラフトの材料として好まれ、さまざまな伝統工芸と結びついている。

竹骨を1本1本切断して使用するという加賀提灯独特の製法で仕上げたインテリア照明は、モダンなフォルムとやさしい光が特長。

匠の技

松田 弘氏

●まつだ ひろし

金沢和傘製作の全工程を一人で手がけることのできる全国唯一の職人。傘職人であった父親の方針で、傘貼り、骨削りなど、あらゆる工程の技術を習得。県外、海外からの注文や修理の依頼が絶えない。こだわりは「持つ女性の姿をいかに美しく見せるか」ということ。

深く余韻のある音響が特徴の銅鑼は、茶事において重要な役割を担い、通常「大・小・大・小・中・大」と七点打つことで、腰掛にいる客を迎える合図となります。また手前の精神統一のために叩くという医師もいるといえます。銅と錫の合金「砂張さほり」を鑄造し、音色を考えながら錘打ちを行い、最後に漆で仕上げるという銅鑼の製作工程には、優れた音感と高度な鍛造技術が求められます。

「音が宇宙か、宇宙が音か 音は宇宙のはじまりである」

砂張銅鑼を生んだ初代魚住為楽が残した言葉は、その優れた技術と銅鑼の音色とともに、今に受け継がれています。



かつて雨の金沢の街には、いたるところに和傘の花が咲き、その美しさを競い合いました。実用面では洋傘が台頭したものの、今も金沢和傘の伝統技術は受け継がれ、インテリアの一部としても愛用されています。

金沢和傘の真骨頂は、それを開いたときに表れる、鮮やかな色彩と文様にあります。秋晴れの日の外出に携えて行きたい日傘には、色鮮やかな楓の葉が漉き込まれ、傘を持つ人の美しさを引き立てます。

雨雪が多い金沢で育まれた技術を受け継いで、手入れが良ければ半世紀も使うことができる丈夫さを身上としている和傘には、ものを長く大切に扱う日本の美学も表れています。

砂張銅鑼

茶事の文化が育んだ音の深遠

金沢和傘

和の風情あふれる、色と模様の饗宴



希少伝統工芸

KISHODENTOU
KOUGEI

華やかさと機能美が同居する金沢和傘。持つ人の佇まい、立ち居振る舞いを美しく演出する。

金沢箔



① (株) 今井金箔
〒920-0968 金沢市幸町7-3
☎076-223-8989



③ (株) 金銀箔工芸さくだ
〒920-0831 金沢市東山1-3-27
☎076-251-6777



⑤ (株) 箔一本店 箔巧館
〒921-8061 金沢市森戸2-1-1
☎076-240-0891



② かなざわカタニ
〒920-0902 金沢市尾張町2-16-80
☎076-263-6111



④ 金箔工芸 田じま
〒920-0855 金沢市武蔵町11-1-2F
☎076-263-0221



⑥ 箔座 本店
〒920-0843 金沢市森山1-30-4
☎076-251-8941

金沢九谷

A 片岡光山堂
〒920-0936 金沢市兼六町2-1
☎076-221-1291

B 鈴木商舗
〒920-0855 金沢市武蔵町1-13
☎076-221-6666

C 九谷巴商会
〒920-0936 金沢市兼六町2-13
☎076-231-0474

D 九谷焼長寿堂
〒920-0961 金沢市香林坊2-4-5
☎076-221-1822

E 九谷焼諸江屋
〒920-0981 金沢市片町1-3-22
☎076-263-7331

F 黒龍堂
〒920-0853 金沢市本町1-5-3 リファールF
☎076-221-2039

G 順風堂
〒920-0904 金沢市下近江町40
☎076-231-2700

H 野村右衛門堂
〒920-0936 金沢市兼六町2-3
☎076-231-5234

I 北山堂
〒920-0962 金沢市広坂1-2-33
☎076-231-5288

J 矢木源山堂
〒920-0962 金沢市広坂1-2-36
☎076-231-6511



金沢伝統工芸ショップガイド

お気に入りの逸品を選ぶ時間をゆっくり、楽しむ。
旅の折に訪れたい、伝統工芸のショップガイド。



加賀繡

29 小林刺繍舗
〒921-8015 金沢市東力1-130
☎076-291-5150

30 めいの今井
〒920-0967 金沢市菊川2-10-12
☎076-231-7271

31 縫工房 蘭鳥
〒920-0831 金沢市東山1-26-7
☎076-252-2177 (ひがし茶屋街)

金沢仏壇



7 (株) 池田大佛堂
〒920-0854 金沢市安江町5-7
☎076-222-5550

8 池田仏壇店
〒920-0855 金沢市武蔵町5-38
☎076-231-6665

9 不今村佛壇店
〒921-8055 金沢市西金沢新町178-1
☎076-249-1366

10 卯野屋仏壇店
〒920-0854 金沢市安江町15-44
☎076-263-9570

11 金沢仏壇商工業協同組合
〒920-0855 金沢市武蔵町8-2
☎076-223-4914

12 北村仏壇店
〒921-8851 野々市町本町5-4-7
☎076-248-3362



13 (株) 澤田仏壇店
〒920-0854 金沢市安江町3-15
☎076-221-2212

14 (株) 清水仏壇店
〒920-0968 金沢市幸町6-5
☎076-222-2861

15 ②竹村仏壇店
〒921-8031 金沢市野町2-6-3
☎076-241-6778 (野町駅前)

16 中村仏壇店
〒920-0851 金沢市笠町1-14
☎076-231-5073

17 ③塗師岡仏壇店
〒920-0843 金沢市森山2-1-29
☎076-253-2201

18 ④塗師岡仏壇店
〒921-8031 金沢市野町1-2-36
☎076-241-0795

19 はやし仏壇店
〒921-8033 金沢市寺町5-5-17
☎076-241-8690

20 三島仏壇
〒920-0862 金沢市芳斉2-4-2
☎076-221-8015

21 森田仏壇店
〒921-8031 金沢市野町3-2-28
☎076-241-1375

22 (有) 山田仏具店
〒921-8033 金沢市安江町13-32
☎076-221-2306

23 柚森仏壇店
〒921-8033 金沢市寺町2-11-40
☎076-241-4571

24 (株) 米永仏壇
〒920-0058 金沢市示野中町1-10
☎076-221-1930

金沢漆器



25 赤地漆器店
〒920-0805 金沢市小金町12-2
☎076-252-8939



26 (株) 能作
〒920-0962 金沢市広坂1-1-60
☎076-263-8121

27 (株) 石田漆器店
〒920-0981 金沢市片町1-7-21
☎076-261-2364

28 (株) 和幸
〒921-8163 金沢市横川7-43
☎076-247-4455

加賀友禅

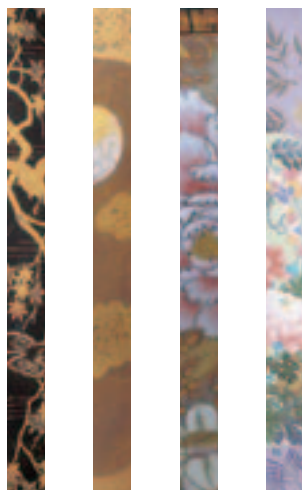


32 協同組合 加賀染振興協会
〒920-0932 金沢市小町町8-8
☎076-224-5511

希少伝統工芸



33 金沢・クラフト広坂
〒920-0962 金沢市広坂1-2-24
☎076-265-3320



【編集・発行】

金沢工芸普及推進協会

【編集協力】 石川県加賀刺繍協同組合・石川県箔商工業協同組合・金沢九谷振興協同組合・金沢漆器商工業協同組合・金沢仏壇商工業協同組合・協同組合加賀染振興協会

【取材・撮影協力】 西田家庭園 玉泉園・金沢城・兼六園管理事務所、蛸屋、壽屋

〔2003 vol.2〕平成15年9月発行